

なるべし天武紀に問王卿以垂端事と見え莊子所無端崖之辭と見えた

〔名物六帖人事四言譯視聽○形語佩文韻府蘇軾怪石供海外有<sub>ニ</sub>能言相喻以外形手語品問其妾興之手語<sub>ニ</sub>一

〔近世奇跡考二鹿野武左衛門仕形話

元祿の頃江戸に坐敷仕形ばなしといふ事おこなはる、

〔類聚名物考人事五〕あどうつ。

跡打

人の物語するを、その對手となりて、跡につきてうち答ふるを云ふ、中古の方言なり、猿樂の三番三の諷物にも、あとの太夫殿といへり、人のいふ詞の跡を打といふ意なるべし。

〔大鏡八〕そもそもおまへは、ひと、せよつぎのぼだひかうにて、ものがたりし給ひし、あながちに

ゆよりて、あとうち給ひしと見たてまつるは、おひほうしのひがめかといへば。<sub>○下略</sub>

〔枕草子六〕まさひろはいみじう人にわらはる、物哉。<sub>○中略</sub>げにぞ詞づかひなどのあやしき、

〔枕草子二〕大力たさしむかひてもなめきは、などかくいふらんとかたはらいたしましてよき人などをさ申ものはさるはをこにていとにくし、おとこ志うなどわろくいふいとわろし、我つかふものなど、おはするの給ふなどいひたるいとにくし、こゝもとに侍るといふもじをあらせばやと、きくことこそおほかめれ、あいぎやうなくとことば志なめきなどいへば、いはる、人もきく人もわらふ、かくおぼゆればにや、あまりてうろうするなどいはる、まである人もわろきなるべし、殿上人宰相などをたゞなる名をいさゝかつゝましげならずいふは、いとかたはなるをげによくさいはず、安房のつぼねなる人をさへ、あのおもと、きみなどいへば、めづらかにうれじとおもひてほむることぞいみじき、殿上人きんだちを、御まへよりほかにてはつかさをいふ、又御前にて物をいふとも、きこしめさんには、などでかは丸がなどいはん、さいはざらんにくし、かくいはんぞわろかるべき事かは、